

令和2年1月号

◆荒井類 選

《鑑賞によって面白い句に変身》

戦争が廊下の奥に立ってゐた

渡辺白泉

これを面白い句のひとつだと言え、多くの方から怪訝な視線を向けられそうだが、宇多喜代子の見解だと言え「ふ～ん、そうなんだ」とは言ってもらえるだろう（権威主義だけどね）。さて掲句を面白い句に分類する、その心は…。以下は、宇多喜代子の言葉である。

この間、「俳句が面白い」と言う中学生の意見にびっくりしたんです。どの俳句が一番面白いかと聞いたら、渡辺白泉の掲句だという。昭和十四年に出来た句です。これ、大人が解釈すると、やがて来る戦争に対する不安だとか、わりと深刻です。ところが中学生は面白いという。どこが面白いのかと聞くと、「戦争は悪いやつです。だから廊下に立たされています」と。私はこれが一番の名鑑賞だと思って、拍手喝采しました（笑）。

宇多の言うように「大人の誰ひとり、それを面白い句とはとらない」句も、この中学生のような読み方をすれば、「面白い句」に大変身となる。

俳句は、ひとたびおおよけ（パブリック）になれば、作者のものではなく、読者（鑑賞者）のものになるという。読者（鑑賞者）の読み方によっては、滑稽俳句に変身する句も少なくないのかもしれない。

《立^{いば}尿る老女の如く恋いこがる 山崎愛子》

掲句に接してフーテンの寅さんの啖呵バイの口上を思い出した。「ちゃらちゃら流れるお茶の水。粋なね～ちゃん立ち小便」。昔は女性でも立ち小便をすることがあったのだと、寅さんの口上からも掲句からもわかる。

兜太いわく、「年老いた女性が立ったまま小用をたしているのですが、自分の男を恋う気持ちも、あのあけすけな姿に似ていると思うのです」。

恋する女（男）の姿は、（本人は大真面目でも）はたから見ると、どこか滑稽

さが漂うものである。

兜太によれば、句に卑猥な感じが残らないのは、句の「格調」のためだと言
い、「定型の格調というものを味読願いたい」とも言っている。

《大頭の黒蟻西行の野糞 金子兜太》

兜太は、「初夏のある日、河内平野の弘川寺に西行の墓と堂を訪れました。堂
には便所がないので、当時は野糞だったのさ、と勝手なお喋りをしていたの
ですが、そのうちに、かなり頭の大きい黒蟻が一匹、堂の横の地面を歩いて
いるのが目に入りました」。そして、野糞の西行のそばを黒蟻がのそのそ通り、西行
がその大頭を面白そうにのぞいている。黒蟻もまた、野糞の西行を愉快そうに
ながめているという滑稽味のある景を想像し、掲句をものにしたのである。広
義の滑稽句に含めたい。

金子兜太の鑑賞と自句自解からの引用が多くなったが、かの大先生も現代俳
句に「笑い」は「大変に必要」と言っていた。

《本歌取りした滑稽句》

ながむとて花にもいたし頸の骨 西山宗因

談林派の祖・西山宗因（一六〇五～八二）の掲句は、次の西行の歌の本歌取
りである。「ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別れこそかなしかりけり
（西行『古今和歌集』）」。

西行の歌意は、「ずっと花を眺めているせいか、花に情が移って、花たちと
散り分かれてゆくのが悲しく思われる」ということ。これを踏まえて「あお向
いて桜の花を眺め入っていたために、首の骨が痛くなった」と滑稽句にしたの
が宗因の俳句。

『万葉集』の歌を藤原定家（『新古今』）が本歌取りし、さらに定家の歌を西
山宗因が本歌取りして滑稽句にしたものもある。

・ 苦しくも降り来る雨か三輪の崎 狭野^{きの}の渡りに家もあらなくに（長^{なが}奥^{おく}磨^{まる}
『万葉集』卷三）」

不本意にも降ってくる雨だなあ、三輪の崎の狭野の渡しに家もないのに。

・駒とめて袖打ち払ふ蔭もなし佐野の渡の雪の夕暮（藤原定家『新古今集』）
馬をとめて、袖の雪を払い落とすような物影もない、佐野の渡し場の雪の夕暮れどきよ。

・雪にとめて袖打はらふ駄賃かな（宗因）

旅の途中で激しい雪にあった。折りよく通りかかった馬子を「とめて」、「袖打はらふ」ほどのなけなしの錢で、高い「駄賃」を支払ったというのが句意。

定家の雅を俗に転じ、「貴人定家の上品趣味をからかうと同時に、庶民の自嘲的哀感がよく出ている」とは、清水哲男（『増殖する俳句歳時記』）の弁。若き芭蕉が属したこともある談林派の句を眺めておくのも意味のないことではない。

（文中敬

称略）